

## 2. 馬場目と白山信仰

五城目町馬場目は、崖や傾斜地を表す「ババ」からきているという。したがって、川沿いの崖ある谷間の土地というのが『角川日本地名大辞典』の解説である。

ところが、この地形は県内各地にみられるのだが、外に馬場を名乗る地名は見られない。もしかして、外に命名のいわれがあるのではなからうか。

東京堂出版『地名用語語源辞典』によると「ババ」には、次の六例があるという。

馬の調練場、  
神社の参道、  
通りや街道、  
家の前庭、  
崖や傾斜地、  
山上の平坦地。

この例示をヒントに、馬場目について、もう少し詳しく調べてみた。すると、この地域の中心地寺庭には、古い白山神社があったという。建長・弘安の棟札が残っているという。もしかして、白山社の参道の意味が拡大されて、この地域の広域地名になったのではないだろうか。

神社の参道は、往々にして馬場の名で呼ばれることがあるからだ。例えば、大津市日吉大社の場合である。琵琶湖岸から神社にいたる参道が馬場（ばば）の名で呼ばれているのである。

これら神社の祭りに際しては、流鏑馬（やぶさめ）

が奉納されたり、競べ馬<sup>くらべうま</sup>が行われたりしている。神事の場所は、神社の参道である。したがって、参道は馬場を兼ねていたことがわかる。

白山社の場合は、特に、山岳信仰の登山口を馬場<sup>ばんば</sup>と呼ぶものである。石川県鶴来町白山比神社が加賀馬場、福井県勝山市平泉寺が越前馬場、岐阜県白鳥町長滝寺が美濃馬場とよばれてきた。

考えるに、神社の参道を通り登山するところから、ある程度のまとまりの信仰圏を馬場と呼ぶようになったものであろう。

五城目町馬場目も白山信仰の中心が寺庭にあり、ここを中心に太平山にかけて修験の霊場と考える

ことができる。白山社を祭った人々が、古くから住みつき、社を中心にして団結し、この地域を開発していったものであろう。

次ぎに問題になるのは、馬場目の「目」の意味である。「馬場」をある程度の広がりをもつスペースと考えるとき、「目」はその地域の中心点（ポイント）と考えられないだろうか

五城目の場合も、「いそうら」（五十浦）が始まりとされ、八郎潟東岸をいう地名であったとされている。湖岸の中心として、人の集まりやすいところに市が立ち、これが「いそ」の「目」になったものである。秋田県内には、多くの「目」地名が残るが、以上のように考えると合理的に解釈できるのである。

馬場目について、白山信仰から始まるとする愚見を述べてみた。このように考えるときに、歴史的に合理的と考えたからである。

（秋田地名研究会会報21号 佐藤貢）

## 3. 馬場目

これは大きな城下町の場合は、馬の調教所のあった所の意であるが、馬場目の場合は崖（ハマ・ハバ・ママ・パパ）や広場の意である。

すなわち、川にそった崖のある谷あい<sup>やあい</sup>の場所をあらわす地名である。

（五城目町史から）

## ひづらおか

ひづら  
南面岡

以下の文は、同碑に刻まれている漢文を和文譯したものです。

陸軍大將兼左大臣二品大勲位熾仁親王<sup>てんがく</sup>八龍湖は北方の名勝たり。獨り風色の愛すべきのみならず、利澤生民に被る事も廣く且大なり。

今茲秋九月十四か車駕秋田県に幸せられ、蹕<sup>ひつ</sup>を湖上の行宮<sup>ぎやうきやう</sup>に停め給ふ。湖は周圍廿五里、牡鹿島<sup>おしか</sup>その西、本山、眞山、寒風山<sup>ていりつ</sup>鼎立して秀を争う。